



14:00 放鳥式典
コウノトリの郷公園内の特設テントで三江小学校児童などの合唱を皮切りにして、放鳥式典が始まった。中貝市長が地元を代表して喜びのことばを述べた



12:15 報道陣殺到
テレビ局、新聞社、出版社など多くの報道陣が押し寄せ、会場の随所で取材活動が行われた。韓国、ロシアなど海外メディアからの取材もあった



14:07 木箱設置
コウノトリが入った木箱が軽トラックで放鳥場所に移動され、コウノトリの郷公園職員が、一つずつ慎重に所定の場所に設置した



12:32 見学者続々
一般の見学者も正午ごろから集まり始め、早くから撮影場所を確保した。シャトルバスの出発地であった豊岡総合庁舎駐車場では長蛇の列ができた



14:30 放鳥
秋篠宮ご夫妻が1つ目の木箱をテープカットで開けると、コウノトリが勢いよく羽を広げ飛び出し、観衆から大きな歓声が上がった

9.24 コウノトリ自然放鳥 ドキュメント

34年ぶりにコウノトリが大空に向けてどのように飛び立つのか？
約3,500人の観衆は期待と不安を合わせ持ち、^{かたず}固唾をのみながらその瞬間を待った
人間とコウノトリとの新たな挑戦が始まった



14:40 コウノトリ舞う
放鳥されて大空を優雅に舞うコウノトリ。5羽ともしばらくすると郷公園に戻り、羽を休めた



14:49 観察

放鳥したコウノトリを観察する郷公園職員。現在もコウノトリ・パークボランティアなどの協力を得ながら地道な観察活動が続けられている



14:45 感動

三江小学校、小坂小学校の児童も放鳥会場に駆け付け、コウノトリが舞う姿をいつまでも見つめていた

コウノトリの野生復帰が目指すもの

豊岡市長 中 貝 宗 治



コウノトリの放鳥が無事に終わってコウノトリの郷公園で記者会見を行う中貝市長

1. コウノトリとの

約束を果たす

1965年、絶滅に向かつて減少するコウノトリを救う最後の手段として、野生のコウノトリを捕獲して檻の中に閉じ込めたとき、私たちは「いつか、きつと空に帰す」と、約束しました。約束は果たされなければなりません。

かつてコウノトリは、人里に暮らす鳥でした。コウノトリが里山に巣をつくり、空を舞い、水辺でエサをついばむ姿は、当たり前のあるふれた風景でした。種としてのコウノトリを「本来の場所」に帰すこと。それは世代を超えて受け継がれてきた「豊岡の願い」です。

2. 種の保存に関し

国際的な貢献を行う

コウノトリは、ロシアのア

日本最後のコウノトリ生息地として、今後とも種の保存に関する国際的貢献を果たしていきたいと考えています。

3. コウノトリも住める

豊かな環境を創造する

コウノトリは、自然生態系の中で食物連鎖の頂点に立つ大型の肉食の鳥です。したがって、コウノトリが再び野生で生息できるためには、それを支えることができる豊かな自然（川や水路、田んぼや里山などに多様で膨大な生き物が暮らす自然）の再生が不可欠です。

と同時に、コウノトリを暮らしの中に受け入れる文化の創造も大切です。コウノトリを絶滅に追いやった環境破壊は、実は私たちの体に深く染み込んだ生活様式と価値観（文化）が引き起こしました。それを環境適合型へと変えていくことも不可欠です。そしてそのような豊かな自然と文化は、コウノトリにとつてのみならず、実は人間にとつてもすばらしい「環

境」であるにちがいありません。コウノトリの野生化をシンボルとしながら、私たちはコウノトリも住める豊かな環境（自然と文化）を創造していきます。

この取り組みを続けていくためには、経済的にも自立することが大きな課題です。コウノトリ野生復帰の取組みと経済活動が相互に共鳴しながら互いを高め合っていく、持続可能なまちづくり。その道にはさまざまな困難もあるでしょう。しかし、「コウノトリ」にこだわって取り組んできたこれまでの歴史が、市民の自信となり、今後も「豊岡型」を貫くことで、国内外の連携がより深まって新しい時代を切り拓いていけるものと確信いたします。

人口規模は小さくても、世界の人々に尊敬され、尊重されるまち、「小さな世界都市」の実現に向かって、豊岡は挑戦を続けます。

（平成17年9月24日）

2005年9月24日、環境の悪化によって日本において一度は絶滅したコウノトリが、40年に及ぶ人工飼育を経て、再び豊岡の空にはばたきました。

「一度絶滅した野生動物を飼育下で繁殖させ、もう一度かつての生息地である人里に帰していく」

これは、大変な時間とエネルギーとコストのかかる事業です。豊岡はなぜコウノトリの野生復帰の取組みを続け、何を目指しているのか。

共生を真剣に考えるとき

NPO法人コウノトリ市民研究所 上田尚志さん(江本)



コウノトリの野生復帰に向けた大きな節目、自然放鳥が無事に終わりました。私もその瞬間に立会いましたが、大空を飛ぶ姿は実に美しかったですね。自然放鳥でコウノトリが市民の見えるところによつて来ました。いよいよコウノトリと人間がどのように共生していくのか真剣に考えなければなりません。

最後の野生コウノトリが捕獲された昭和40年代と比較すると、多くの水辺環境が失われ、厳しい自然状況にあります。しかし、里にはメダカやホタルなどの生物も生息しており、自然の息の根は止まっています。湿地や沼地、小川などを何らかの方法で復活させればコウノトリの住みやすい環境は再生できます。

NPO法人コウノトリ市民研究所

コウノトリ野生復帰計画を市民の立場で支援するため平成10年に設立。生き物調査、ピクトーブづくり、里山林整備など、市民レベルでできる活動を展開。同研究所の主役は子どもたちで、「田んぼの学校」など子どもを対象にしたさまざまな月例行事を実施している。誰でも自由に参加可。

問合せ コウノトリ文化館 ☎23 - 7750

市民研究所が主催する「田んぼの学校」で、川や田んぼに入って虫や魚を追いかける子どもたちの表情はとも生き生きとしています。その表情を見てみると、子どもたちにとつて自然とのふれあいはとても大切なことだと実感します。

今後も、コウノトリを象徴とした豊岡の自然環境について、子どもたちや一般市民の皆さんとともに、自ら考え、学んでいきたいと思っています。

冷静に温かく見守って

コウノトリパーク・ボランティア 西村英子さん(栄町)



息子がパークボランティアの1期生で活動している様子を見て、これはおもしろそうと翌年から私も参加しました。

小学生の時に見た最後の野生コウノトリの姿と、「滅びゆくものはみな美しい。しかし、滅びさせまいとする願いはもつと美しい」という阪本元県知事の言葉が心の片隅にあり、コウノトリと関わりを持つことはとてもうれしいことでした。

3年前に豊岡に野生コウノトリ「ハチゴロウ」が飛来してから、週半日ですが行動観察に出かけました。居場所を探すうちに見かけた、キジやカワセミの美しさ、ヒバリの擬態、セキレイのダンス。今まで気づけなかった木々の色づき、霧の壮さ。観察は

コウノトリパーク・ボランティア

県立コウノトリの郷公園が行うさまざまな事業を支援するボランティアグループ。平成13年発足。同公園主催の「ボランティア養成講座」で生態や自然環境を学んだ受講生が、放鳥したコウノトリの追跡調査やドジョウ放流、里山整備などをサポートしている。会員は、小学生から60歳代まで約90人。

問合せ コウノトリの郷公園 ☎23 - 5666

自然放鳥され、いよいよ本格的な追跡調査が始まりました。鳴き交わしや威嚇など、個体間の関係がとても興味深いです。

野に帰されたコウノトリたちには、幾多の試練が待ち受けています。皆さんの近くに飛来したときはどうか、冷静に温かく見守ってください。

子どもたちの声



三江小5年 瀬河 美紀さん

放鳥したコウノトリが松の木で子育てをして、そのヒナがえさを食べて大きくなり、ほかのコウノトリとヒナを生んで、そのヒナがまたヒナを生んで…そんなふうにして絶滅危惧種でなくなったらいいなと思います。コウノトリのことを一人でもたくさんの人に知ってもらってコウノトリを大切にしたいです。



三江小5年 田口 優香子さん

放鳥の後、みんなが国際かいぎの打ち合わせで学校に帰っても私は郷公園に残ってました。すると私の頭の上をコウノトリが飛んでいきました。私はとても感動しました。この様子をクラスみんな、できれば全国の人に見せたかったです。世界が注目するコウノトリが住む三江地区はとてもすばらしい所だと思えます。ここに住んでいて本当によかったです。